

# 笠岡の歴史Q & A



笠岡市文化連盟創立50周年記念事業  
笠岡市市制施行60周年記念事業

## 笠岡市文化連盟

## 発刊にあたって



笠岡市文化連盟  
会長 仁科 宰治

この冊子は、「笠岡の歴史Q&A」と題して、笠岡の歴史について、安東主任学芸員が平成8年に新聞に掲載されたものをもとに、編集、作成したものであります。

平成24年は笠岡市文化連盟が生まれてから50年、笠岡市が生まれてから60年という節目の年であり、その記念の冊子として、文化連盟会員、市内の小・中学生などを対象に配布するものです。

この冊子を読んだ子どもたちには、自分たちの今住んでいる笠岡の歴史をより詳しく知ってもらい、笠岡のすばらしい未来を築く一人となっただけでなく、また、先生方にも、学校の授業等で参考としていただきたいという笠岡市文化連盟の思いがあります。

子どもたちには、笠岡の歴史を知ってもらうことで、笠岡への誇り、愛着心を持っていただき、これからすばらしい笠岡の未来を築いてくださることを期待いたします。



発刊によせて



笠岡市教育委員会  
教育長 浅野 文生

笠岡市の文化振興を長く支えていただいています笠岡市文化連盟におかれましては、日頃から大変感謝いたしているところでございます。

このたびは、笠岡市文化連盟創立50周年・笠岡市市制施行60周年という記念の年に記念事業として「笠岡の歴史Q&A」を発刊されますこと、心よりお喜び申し上げます。

教育委員会では、笠岡市の歴史・文化を伝承するため、民俗・考古・歴史資料などの収集に努め、適切な保護・保存と公開・展示に努めています。また、学校教育と連携し、児童・生徒に積極的に紹介しています。

この度の冊子は、文化財をもとにして、笠岡の歴史と文化について、小・中学生にもわかりやすく、興味を持っていただけるきっかけとなると思います。また、笠岡への郷土愛を育むとともに、笠岡の発展を考える貴重な資料になると思います。

笠岡市文化連盟におかれましては引き続きまして、笠岡市の文化・芸術の発展にご支援ご協力をよろしくお願い申し上げます。

①人がやって来たのはいつ? ..... 1

②縄文土器には縄目の模様がついていた? ..... 2

③縄文人はどんな暮らしをしていたの? ..... 3

④弥生時代の青銅器が見つかっているの? ..... 4

⑤最大の古墳はどこに? ..... 5

⑥古墳から何が出土するの? ..... 6

⑦古墳の横穴式石室とは? ..... 7

⑧古代の特産品といえば? ..... 8

⑨古代の支配者はどんな人? ..... 9

⑩笠岡の武士は源平の戦いに参加したの? ..... 10

⑪陶山氏はどんな武士だったの? ..... 11

⑫笠岡に城があったの? ..... 12

⑬戦国時代に合戦があったの? ..... 13

⑭戦国武将たちはその後どうなったの? ..... 14

⑮どんな代官がいたの? ..... 15

⑯敬業館はどんな学校だったの? ..... 16

⑰カ石とはどんな石? ..... 17

⑱笠岡が県庁所在地だった? ..... 18

⑲三つのこぼれ話 ..... 19

⑳笠岡の町はいつごろつくられたの? ..... 20

㉑港はどんな役割を果たしてきたの? ..... 21

㉒土地はどうやって増やしたの? ..... 22

㉓笠岡諸島にはどんな文化財があるの? ..... 23

㉔どんな民話があるの? ..... 24

㉕どんな地名があるの? ..... 25

㉖どんな方言を使っているの? ..... 26

㉗どんな遺跡があるの? ..... 27

㉘発掘調査とは? ..... 28

㉙文化財はなぜ大切な? ..... 29

## ① 人がやって来たのはいつ？

### ■ 旧石器時代

一回目は、笠岡にはじめて人類が登場した旧石器時代のお話です。

日本列島にアジア大陸から人が渡って来たのは、今から4万年以上前のことです。彼らは火と石器（石で作った道具）を使い、狩りをして暮らしていました。そして、笠岡では、1万5千年以上前には、すでに人が生活していたことが分かっています。なぜ分かるのかというと、1万5千年以上前の旧石器時代につくられたと考えられている石器が、片島・明地島・高島・北木島・六島などで発見されているからです。

でも、そんな石の道具で、ほんとうに物を切ることができたのかしら、と考える方もいるかもしれませんが、実は石器というのは、そのへんに転がっている石を適当に拾ってきてこしらえたわけではなく、ちゃんと石を選んで作っているのです。金属のなかった当時は、ガラスのように鋭く割れる石は貴重品でした。

ところで、笠岡に人がやって来たころは、氷河期といわれるくらい、地球全体が冷えていた時期にあたります。今から2万年前には、気候の寒冷化が特にすすんでいて、北極と南極はぶ厚い氷におおわれていたのですが、海水面が今より100メートルあまり低かったといわれています。ちょっと考えにくいことですが、瀬戸内海は完全に陸地化して、平原だったということになります。

そして現在、海に浮かんでいる高島・北木

島などの島々は、平原の中にある低い山です。

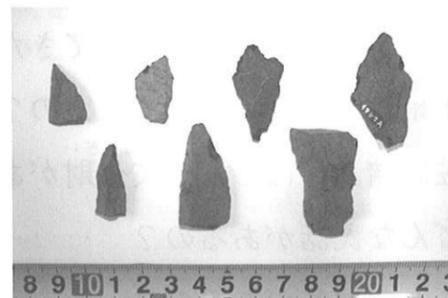
旧石器時代の人たちは、その山の上に登って、一体何をしていたのでしょうか。

現在、瀬戸内海の海底から、たくさんの化石した骨が見つかっています。今では絶滅してしまったナウマンゾウをはじめとするさまざまな動物の骨です。おそらく、旧石器時代の人々は、見晴らしのよい山の上から、狩りの獲物となる瀬戸内平原の動物たちを見張っていたのでしょう。

笠岡にはじめて足を踏み入れた人々は、獲物を求めてはるばるアジア大陸から渡ってきた、ハンターの子孫たちだったのです。



真鍋島沖で見つかったナウマンゾウの牙と歯。



片島で採集されたナイフ形石器と尖頭器。

安山岩製で鋭い刃を持っている。

## ② 縄文土器には

### ■ 縄文時代

今回は縄文時代のお話です。縄文時代は、最新の学説では、今からだいたい1万5千年くらい前に始まり3千年前ごろまで続いたとされる、狩りと漁と採集の時代です。

今から1万5千年ほど前に、人類史上で最大級の発明がありました。土器の発明です。土器は、今でいうお皿やなべはもちろんのこと、物入れや食料庫などの、あらゆる役割を担うたいへん便利な道具でした。

そして、食べ物を煮炊きすることによって、それまで食べるのが難しかったものも、おいしく食べられるようになりました。さらに、土器の発明に続いて、狩りをするための弓矢や、定住生活に欠かせない竪穴住居（つまり家のことです）も登場して、人間の生活はしだいに豊かなものになっていきました。

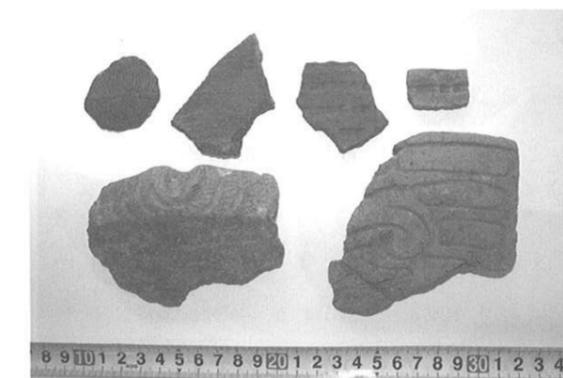
このころになると、長かった氷河期が終わり、地球はだんだん暖かくなっていきました。氷は溶けだし、水の量が増えたので、海面はそれまでとは逆に、どんどん上昇しはじめました。こうして瀬戸内海が誕生しました。やがて、笠岡の人々は食料の豊富な海辺に住みつくようになりました。こうして各地に集落ができていきます。

人々は、食べ終わった貝の殻を、1カ所にまとめて捨てていました。これを私たちは貝塚と呼んでいます。貝塚からは、貝殻だけでなく、ほかの食べ物や使い終えた道具なども見つかります。岡山県内では、倉敷市から笠

岡市にかけて、特にたくさんの貝塚が残っています。西大島や神島、今では海から遠く離れている有田や東大戸などにも貝塚があり、当時は海がその近くまで入り込んでいたことを証明しています。笠岡の遠浅の海は、縄文人たちに豊富な食料を提供してくれたのでしよう。

ところで、皆さんは縄文土器というと、どんな土器を想像しますか。縄目の模様、あるいは前衛的な芸術作品のような火炎土器などが一般的なイメージのようですが、そうではない土器もたくさんあります。そして縄文時代でも後半になると、きゅうす形やつぼ形など、実にさまざまな形の土器が現れます。

その模様についても縄目だけではなく、細い竹管のようなものや貝を使ったり、線を引きたり、部分的に模様をすり消したりして、実にバラエティーに富んでいます。でも、彼らはでたらめに土器を作っていたわけではありません。土器の形や模様は、つねに一定のルールのもとに作られていたのです。そこに、現代と異なる価値観に支配されていた、縄文社会の姿が見え隠れしています。



笠岡市備中原貝塚（上段）と津雲貝塚（下段）出土の縄文土器破片。

③ 縄文人はどんな暮らしをしていたの？

■ 縄文時代

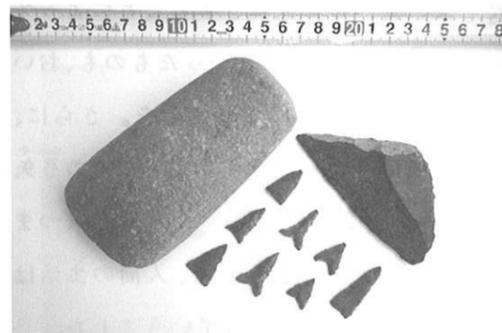
みなさんは、縄文時代というどどんな暮らしを想像しますか。狩りをして生活していたこと以外は、なかなかイメージしにくいのではないのでしょうか。たしかに彼らは狩りもしていましたが、以前の旧石器時代に比べると、その生活ははるかに豊かになっていました。西大島の津雲貝塚では、さまざまな遺物が出土して、当時の生活を物語ってくれています。彼ら「津雲人」の生活を少しだけ見てみましょう。

津雲人たちの生活を支えていたのは、やはり豊富な食料を提供してくれる海でした。男たちはシカの角で作った釣り針や、石のおもりをつけた網を使って魚をとり、女たちは、遠浅の浜辺に出かけては、ハイガイ、カキ、レイシなどの貝を集めました。集落の裏山も、彼らにとっては食料の宝庫です。そこに行くだけで、秋には木の実、春には山菜が簡単に手に入りしました。

冬になると、男たちは弓矢を持って狩りに出かけました。彼らが主に獲物としたのはシカとイノシシです。タヌキなどの小動物をねらうこともありました。

こうして季節にあわせて計画的に食料を手に入れることができるようになった彼らですが、その収穫は、まだまだ安定したものではありませんでした。彼らの生活は、自然の恵みに頼ったものだったのです。それだけに、食料のことや病気・けがなど、将来への不安も大きかったことでしょう。

やがて、彼らのなかから、特別な存在の人々が現れました。津雲貝塚からは、貝の腕輪をいくつもはめた女性や、シカ角の腰飾りをつけた男性の人骨が発見されています。これらは単なるファッションではなく、特別な意味をもつアイテムだったと考えられています。女性は巫女、男性は村の長や神官のような役割を果たしていたのではないのでしょうか。彼らは、祈りと呪いによって物ごとを解決しようとしていました。それは、合理主義の現代とは全く異なる価値観の世界でしたが、戦争のない平和な社会でした。



津雲貝塚から出土した石器（石の道具）。左から、木をきるための斧、矢の先につける「やじり」、ナイフ。



津雲貝塚で見つかった、両腕にたくさんの腕輪をはめた女性の人骨。

④ 弥生時代の青銅器がみついているの？

■ 弥生時代

大陸から日本に稲作が伝わり、水田がつけられるようになったのは、今から2千5百年（最近では3千年という学説もあります）ほど前と言われています。弥生時代の始まりです。水田はやがて東北地方まで伝わり、日本は本格的な米作りの時代を迎えました。お米を主食にすることで、人々はより安定した生活が送れるようになったのです。特に大きな河川がある地域では、広い平野を利用して、たくさんの水田をつくることができたため、人口が増え、大きなムラが生まれました。

一方笠岡では、比較的大きな河川といえど小田川に向かって北流する尾坂川や、海に向かって流れる吉田川くらいしかなく、水と平地が決定的に不足していました。それまでは豊かな海を背景に繁栄していた笠岡でしたが、米作りに関しては限界があったのです。津雲貝塚のような縄文時代の遺跡からも弥生石器が見つかるのは、海辺のムラの生活が依然として海に支えられていたことを表しているのかもしれませんが。

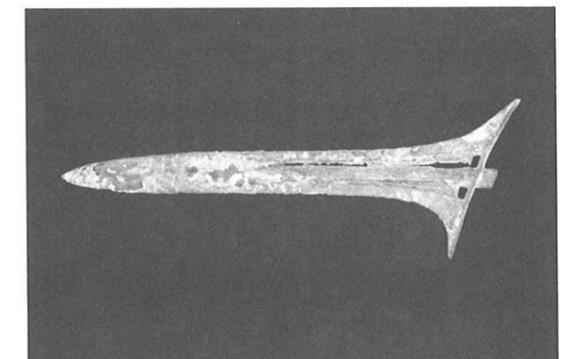
そんな中で、最も大きく変わっていったのは、笠岡市の北端、甲弩や走出の周辺でした。このあたりは小田川と尾坂川によってつくられた小さな平野が広がっており、水田を作るのに適した場所となっています。弥生時代の遺跡が甲弩と走出に多いのはこのためです。おそらくこの辺りには、弥生時代からすでに水田が広がっていたことでしょう。

ところで、米作りとともに日本に伝わって

きたのが、人間を攻撃するための道具、すなわち武器です。そしてこの時代に初めて、金属の道具（青銅器と鉄器）が登場します。鉄器は実用的な農具や武器などに使われましたが、青銅器は銅鐸や銅剣、銅矛などのような、神を祭る道具としても使われました。

昭和57(1982)年、笠岡湾干拓地から一本の銅戈が出土して話題になりました。戈というのはもともと武器ですが、日本では銅剣などと同じように、祭りの道具として使われるようになりしました。それがなぜ当時は海だったはずの笠岡湾干拓地で見つかったのかは分かりませんが、とにかく笠岡でも弥生時代に青銅器を使った祭りが行われていたことが分かったのです。

この時代には、土地や貴重な鉄をめぐって、人々の間に戦いが起こることもありました。やがて、国とでも呼ぶべきムラのまとまりが日本列島の中にも生まれ、そして、邪馬台国の卑弥呼のようなリーダーが登場します。稲作の開始とともに戦争が始まった瞬間から、すでに日本は統一に向かって動き出していたのです。



笠岡湾干拓地から出土した銅戈。神まつりの重要なアイテムだった。

## ⑤ 最大の古墳はどこに？

### ■古墳時代

日本一大きなお墓をご存知ですか。答えは社会科の教科書でもおなじみの大阪府堺市にある大仙古墳(仁徳天皇陵)で、全長が約486メートルもあります。

古墳というのは、簡単にいうと、3世紀中ごろから7世紀ごろにかけて造られた有力者の大きなお墓のことで、円墳や方墳、前方後円墳など、いろいろな形の古墳がありました。特に前方後円墳は空から見るとカギ穴のような独特の形をしている、最も特徴的な古墳です。

笠岡市にも80基以上の古墳がありますが、ほとんどが丸い形の円墳で、前方後円墳はわずかに3基(確実なものは2基)しかありません。そのうちのひとつが、5世紀に造られた笠岡最大の古墳、「双つ塚古墳」です。

笠岡市走出と山口の境界線にあたる山のう上に、11基以上の古墳があって、「長福寺裏山古墳群」と呼ばれています。その中で最も大きいのが「双つ塚」と呼ばれる前方後円墳で、全長は約60メートルもあります。この双つ塚、岡山県内では44番目の大きさというので、いまひとつ実感はわかりませんが、現在井笠地方と呼ばれている地域の中でみると、ダントツの一番なのです。

写真に写っているのが双つ塚です。この小山はすべて人間が汗を流して造ったものなのです。さらに、古墳という今では木や草が生い茂った姿を想像してしまいましたが、造ったばかりのころは、木は生えておらず、あ

るいは葺石という石に覆われ、あるいは埴輪という焼き物を立て並べた、異様な姿をしていたのです。

ところで、なぜ豪族(地域の有力者)たちは競うように大きな古墳を造ったのでしょうか。古墳を造るにはたくさんの人手が必要です。造る古墳が大きければ大きいほど、たくさんの人を支配して働かせることができたということです。豪族たちは、自分の偉大さと権力を世に示すために、わざわざ大きな古墳を造らせたのではないかとされています。

笠岡でも、この山のふもとを行き交う人々は、双つ塚の巨大な姿を見て、そこに葬られた人物の絶大な権力を感じ取ったことでしょう。では、その人物はいったい誰だったのか？それは今でもなぞに包まれたままです。そして、それから1500年を経た現在でも、古墳は山の上から静かに私たちを見下ろしています。



笠岡最大の双つ塚古墳。

現在、長福寺裏山古墳群は、「かさおか古代の丘スポーツ公園」の一部となっており、見学路がつくられている。

## ⑥ 古墳から何が出土するの？

### ■古墳時代

一般に、エジプトのピラミッドや古墳をはじめ、権力者の墓といえば、そこにはたくさんの宝物が眠っていることだろうと考える人が大勢います。たしかにそういう一面もあって、昨今新聞などの紙面をにぎわしている発掘調査の記事のなかでも、最も注目を集めるもののひとつが、古墳からの出土品に関する記事と言ってよいでしょう。

しかし、今あるほとんどの古墳はすでに盗掘を受けて荒らされており、現在私たちが目にしている出土品の多くは、盗掘者が見落とししたり、興味を示さなかった品々と言ってもかごんではないのです。笠岡にある古墳も例外ではありませんが、それでも長福寺裏山古墳群では、盗掘をまぬがれた様々な品が発見されているので、ここで紹介します。

まず、古墳を飾るように並べられていたのが埴輪です。埴輪という、人間をかたどったものを想像されるかもしれませんが、実は埴輪の元祖にして本家は、円筒埴輪という土管を立てたような形の埴輪なのです。人間をかたどった埴輪は、笠岡ではごく少数しか見つかっていません。

次は遺体とともに古墳に納められた副葬品です。下の写真を見てください。上の段にある丸いものは銅鏡です。当時、鏡は呪術の道具として使われていました。その右隣が鎌、土を耕すときに使う鍬の刃先、木をきるための斧といった農具・工具です。乗馬のときに使う「くつわ」の一部もあります。

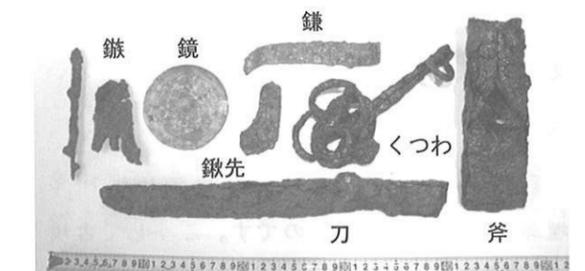
そして鏡の左にあるのが矢の先端につける鏃、いちばん下の長いものが刀、すなわち武器です。鏡以外は、すべて鉄の道具です。

「なんだ、もっと金銀財宝があったのかと思えば、ただの生活道具ばかりじゃないか、つまらない」と感じましたか。でも、鉄の道具は当時にしてみれば貴重品でした。これらの貴重品をすべてそろえた古墳の主は、この地の宗教・農業・手工業・軍勢力などのすべての面を取り仕切っていた大物だったことでしょう。

さらに、これらの副葬品は、私たちにどうして当時の社会のあり方や生活の様子を知るための重要な手掛かりになっています。古墳は、千数百年の時を経て現代によみがえった、タイムカプセルの役割を果たしてくれているのです。



長福寺裏山古墳群の仙人塚古墳から出土した円筒埴輪



長福寺裏山古墳群の東塚古墳から出土した数々の副葬品

## ⑦ 古墳の横穴式石室とは？

### ■古墳時代

皆さんの住んでいる地区に、横穴式石室を持つ古墳はありませんか。写真は、笠岡市内で最大の横穴式石室、走出にある小池古墳の石室内部です。真っ暗な石室の中は、夏でもひんやりとしています。かつて、この石室の中に、古墳の主の遺体が置かれていたのです。

ここに立つとなんとなく思い出すのが、「イザナギノミコトが死んだ妻に会うために黄泉国（死後の世界）まで出かけたが、変わり果てた妻の姿を見てしまい、あわてて逃げ帰り黄泉国の出入り口を石でふさいだ」という古事記の一節です。

さて、ここからが本題です。古墳時代も後期（6世紀ごろ）になると、古墳に遺体を納める施設として、それまでの竪穴式石室に代わって横穴式石室が広く採用されるようになります。横穴式石室というのは横から出入りできる石室のことで、石を積み上げて古墳の中に大きな石の部屋をつくり、そこに棺を安置するのです。もちろん普段は出入り口に石を積んで人が入れないようにしています。

この方法の利点は、出入り口の石をどけさえすれば、石室に何度でも出入りできるということです。つまり、石室に棺が入る限り、一つの古墳に次から次へと新たな遺体を埋葬することができるのです。こうして古墳は、一人のリーダーのお墓（竪穴式石室）から、家族のお墓（横穴式石室）へと変質していきました。ちなみに横穴式石室が登場した

ころは、まだ日本に火葬の風習がなく、遺体をそのまま棺に納めて埋葬していたので、けっこうスペースが必要だったのです。

また、このころになると、古墳は一部の豪族だけのものではなくなっていました。笠岡でも、あちこちに小さな古墳が造られるようになります。北は走出、尾坂から、南は高島、白石島、北木島に至るまで、横穴式石室をもつ古墳がたくさん造られました。

そして、以前（5世紀に）巨大な古墳をもつ長福寺裏山古墳群が造られた山のふもとに、こんどは（6世紀に）大きな石室をもつ小池古墳が築かれたのです。この山はまさに、歴代の笠岡の王たちが眠る、安住の地とでもいべき場所だったといえます。

やがて古墳は造られなくなり、ついに古墳時代は終わりを告げます。次にやって来たのは、仏教の文化と、大きなお寺が造られる時代でした。



小池古墳の横穴式石室。

大きな石を積んでつくられた石室の内部は全長10.6m、高さ2.7mもある。

## ⑧ 古代の特産品といえば？

### ■古墳～飛鳥～奈良～平安時代

笠岡の特産品の一つあげてください、と言われたら、あなたは何と答えますか。魚をはじめとする海産物、北木石、農作物などなど、さまざまな答えが返ってくることでしょう。では、現在とは少しばかりかけ離れた古代の笠岡ではどうだったのでしょうか。ちなみに、海産物は当時も特産品だったのですが、今回のお話からは除外します。

古墳時代から古代にかけての特産品といえば、まずは塩があげられます。塩は人間が生きていくためには欠かせない物なので、大昔から世界各地で塩を手に入れるためにさまざまな工夫が凝らされてきました。

そして古墳時代の備讃瀬戸では、濃縮した海水を土器で煮詰めて塩の結晶をつくる技術が非常に発達していました。笠岡でも、そうやって塩を作ったと思われる製塩土器が、笠岡駅前、高島、白石島などの、当時砂浜だった場所でたくさん出土しています。

古墳時代には、高島・白石島・北木島に小さな古墳が造られました。当時これらの島でお米はそれほど作られなかったでしょう。つまり主食の自給自足ができないのです。それなのに、なぜ古墳を造るほどの力をもっていたのかというと、やはり塩を作っていたことがその理由の一つにあげられるでしょう。

塩の生産に少し遅れて、鉄の生産も始まります。日本では鉄の道具、いわゆる鉄器が登場するのは弥生時代からですが、当時は鉄の

入手を百パーセント輸入に頼って入りました。鉄鉱石もしくは砂鉄を原料にした製鉄が行われるようになるのは、古墳時代からのことです。特に現在の岡山県一帯では製鉄が非常に盛んに行われて、「まがねふく吉備」とまで呼ばれていました。笠岡も例外ではなく、走出、山口、尾坂、入田、東大戸、小平井などの丘陵地帯で製鉄が行われていたことがわかっています。現在でも、黒光りする鉄の塊のような鉄滓（カナクソともいいます）が見つかることがありますが、その近くにはきっと古代の製鉄工場があったのでしょう。さらに有田には、古代の焼き物、須恵器を焼くための窯もありました。

古墳時代から古代にかけて、笠岡の豪族たちは、おそらくこうしたさまざまな産業を掌握することによって力を伸ばしていったものと思われます。



笠岡駅前で出土した製塩土器。



みの越で出土した鉄滓と製鉄炉の壁。

鉄鉱石をもとに鉄を作る製鉄工場があった。

## ⑨ 古代の支配者はどんな人？

■飛鳥～奈良～平安時代

今回は、古代の笠岡に君臨していた豪族のなごに迫ります。まずは、遺跡のお話です。仏教が朝鮮半島から日本に伝わったのは、6世紀の中ごろ、古墳時代後期のことでした。次の飛鳥時代には仏教がより広まり、7世紀後半になると、全国の豪族たちは国の政策ののっつて、次々と寺院を建て始めます。彼らは古墳を造るのをやめた代わりに、大きなお寺を造ることに力を費やすようになったのです。現在知られているこの時代の寺院数は、全国で約500カ所にもものぼります。笠岡にいた豪族も、関戸の地に寺院を建て始めました。これが関戸廃寺です。(実際の寺はとうの昔に絶えてしまい、今では水田となってしまうので、私たちは「廃寺」と呼んでいます。)発掘調査したところ、地面の下には建物跡がちゃんと残っていました。寺の建物は、大陸から伝わってきた最先端の技術を使って造られていました。そして、建物の屋根には、窯で焼いた焼き物が乗せられました。笠岡初の、瓦葺き建物の登場です。壮大なお堂や塔、瓦というものを初めて目にした人々は、その巨大なスケールと威厳に、驚いたことでしょう。

それでは、7世紀後半に、それほどの大寺院を建てることのできた笠岡の豪族とは、いったいどのような人だったのでしょうか。

まず、次の伝説を紹介しましょう。「昔、応神天皇が、かさめ山という山に登られたとき、

風がふいて天皇の笠をふき飛ばした。お供をしていた鴨別命が、『きっと、この山の神が天皇に贈り物をしたいのでしょう。』と進言した。そこでこの山で狩りをしてみると、たくさんの獲物がとれた。天皇はたいへん喜ばれ、鴨別命に『笠』の名を与えられた。これが笠臣のはじまりである。』・・・そして、その笠臣という一族こそが、笠岡にいた豪族だったという説があるのです。ちなみに「かさめ山」とは、応神山(番町地区の北側にある、ちょうど笠をふせたような形の山)のことだと言われています。

伝説が本当の話かどうかは分かりませんが、ここに登場する「笠臣」は、実在した一族です。ちなみに臣というのは家柄を表す称号のようなもので、本当は笠の一字が、名字みたいなものだと思います。笠臣は『古事記』や『日本書紀』にもその名が出てくる地方豪族で、備中国(岡山県西部)のどこかの地域を治めていたそうです。

でも、実は、どこに本拠地があったのかまでは解明されていないのです。総社市、あるいは井原市に本拠地があったとする学説もあるのです。

笠臣は平安時代まで活躍しますが、やがてその名は、歴史の中に埋もれていきます。



関戸廃寺から出土した軒丸瓦。

ハスの花を表した模様がついている。

## ⑩ 笠岡の武士は

源平の戦いに参加したの？

■平安時代末

今から約800年前、瀬戸内海を舞台にして源氏と平氏の大決戦が行われました。世にいう源平の合戦です。この戦いに関する記録の中には、笠岡の武士も何人か登場しています。それは、島地部の真鍋氏と陸地部の陶山氏です。ここでは真鍋氏について紹介します。

治承4(1180)年、源氏がついに打倒平氏の兵を挙げました。一度は源義仲に敗れて都を追われた平氏ですが、水島合戦で勝利して再び勢力を盛り返し、一ノ谷(兵庫県)に城郭を築くまでになりました。そこには、平氏に味方する中国・四国・九州の武士たちが、おおぜい集まってきました。

この一ノ谷に攻めよせたのが源範頼・義経の軍勢です。そして、このとき、平氏方の武士として、真鍋四郎・五郎の兄弟が登場します。二人は西国に知れわたった弓の名手で、特に五郎は、生田森に攻めこんできた源氏方の河原太郎・次郎を自慢の弓を使って次々と倒したエピソードが知られています。この真鍋氏は、もともと笠岡の真鍋島出身であるといわれています。おそらく水軍の性格も合わせ持っていた一族だったに違いありません。

しかし、その奮戦も空しく、義経の行った有名な鶴越えの奇襲によって、戦いは平氏の敗北に終わりました。

やがて平氏は瀬戸内海の支配権を失って、ついに壇の浦で滅亡します。平氏方について

戦った真鍋一族の中にも戦死者が出たことでしょう。真鍋島には、彼らの供養塔や墓といわれる石塔が今でも残っています。

源平の戦いは、武士だけでなく一般の民衆にも影響を与えたようです。笠岡諸島では、源平合戦ゆかりの伝説が数多く残っています。白石島には「平家の隠れ里」があったといい、盆踊りの白石踊は戦死者を弔うために始まったといわれています。

また、北木島には猫の顔が浮き彫りにされたような形の猫岩があります。ひとりの大将が縁起をかついで三毛猫を船に乗せていたところ、船は沈み大將は戦死して、猫だけが生き残ったものの、この岩までたどりつたところで息絶えたといえます。

これらの伝説の真偽はともかくとして、海辺での戦いの多かつた源平の争乱のなかで、笠岡諸島の人々の心に残る出来事が、実際にいくらか起こった可能性はあると思います。



真鍋島に残るたくさんの五輪塔。

真鍋氏歴代の墓といわれ、平安時代末期から江戸時代初期まで、各時代のものがある。

# 11 陶山氏は どんな武士だったの？

鎌倉～室町時代

時は鎌倉時代末の元弘元(1331)年、後醍醐天皇はついに討幕の兵を挙げ、山城(現在の京都府)の笠置山に立てこもった。これに対して鎌倉幕府は大軍を送り込んで笠置山を包囲し、攻撃をしかける。しかし、笠置山の守りは堅く、石や矢に当たって犠牲者ばかりが増え、合戦は膠着状態となった。

このとき、鎌倉幕府軍の中に備中国から来た陶山義高と小見山氏がいた。彼らは一族郎党を集めてこう言った。「どうせ戦って死ぬのなら、華々しい活躍をして死のうではないか。今、全国の武士が集まって攻撃してもビクともしない笠置山を、われわれだけで攻め落とせば、その名誉は末代まで語り継がれるだろう。」50人余りの一族郎党は、皆そろって賛成した。

折しも、その夜は真っ暗で顔も上げられないほど激しい風雨に見舞われていた。陶山義高らは目もくらむような断崖絶壁をよじ登り、建物に火をつけて暴れまわり、笠置山を大混乱に陥れた。こうして、幕府軍は勝利を収め、後醍醐天皇は囚われの身となった。

以上が有名な「太平記」の一節です。陶山氏は、源平合戦のころからすでに活躍している笠岡の武士ですが、彼らを一躍有名にしたのがこの出来事でした。さらに陶山氏は河内の赤坂城に立てこもる楠木正成とも対戦し、大いに奮戦しています。しかし、その奮

戦もむなしく、やがて鎌倉幕府は滅亡してしまいました。

その後、陶山氏は足利尊氏の部下となり、以後はずっと室町幕府の足利将軍の側に仕えていたようです。そして、この陶山氏一族こそが、室町時代の笠岡の領主であるといわれています。

応永19(1412)年に京都で書かれた文書の中に、「備中国陶山庄笠岡遍照寺」という記述があります。遍照寺は京都大覚寺派の中本寺として栄えた笠岡の代表的な寺院ですが、このころすでに、かなり大きな存在の寺院となっていたことがわかります。

おそらく陶山氏は、笠岡の港と海も視野に入れたうえで、遍照寺などの寺を中心にすえてまちづくりを行なったのでしょう。こうして笠岡は、陶山氏の支配のもとで港町としてしだいに発展していくことになったのです。



遍照寺の多宝塔(江戸時代の建物)。  
遍照寺は駅前土地区画整理のため西ノ浜へ移転したが、多宝塔はもともとの場所に残っている。

# 12 笠岡に城があったの？

室町～安土桃山時代

お城と聞いて思い浮かべるのは姫路城のような白かべの天守閣、そして水をたたえた堀と、美しい石垣というのが一般的なイメージではないでしょうか。もちろん、そんなお城は笠岡にはありません。ところが笠岡には、実は二十ヶ所以上の城跡があるのです。

つまり、城跡と言われているものの大部分は、土を掘り上げただけの堀や土塁、柵に囲まれた、いわば砦という言葉でイメージできるような防衛施設だったということです。特に、南北朝時代以後、優位な敵に対して山にこもって戦う戦術が定着してからは、山を削って頂上や中腹に平坦な場所をつくり、城として利用することがありました。これを山城といえます。

笠岡の城跡もすべて山城です。最も有名なのが笠岡城跡、すなわち現在「城山」と呼ばれている山です。城山は笠岡駅の東にある低い山で、頂上に古城山公園があり、いまではみんなの憩いの場となっていますが、400年ほど前はここに戦国の城があって、戦国武将の村上氏がここを利用していたのです。

村上氏は中国地方最大の勢力、毛利氏に比べ、水軍として活躍した瀬戸内海の海賊衆(海の武士団)の、大将のような存在でした。おそらく当時は土塁、柵、門、建物などがあったと思われますが、明治の世になって、埋め立てに使うために山頂の土砂を削り取ったので、そのとき大幅に地形が変わってしま

い、今となっては当時の面影をしのぶことはできません。

この笠岡城は、笠岡の港の利点もあって、戦略的にも重要な役割を果たしていました。天正2(1574)年、毛利氏が備中松山城(現在の高梁市にあります)の三村氏を攻略した際には、その軍勢は笠岡に集結し、小早川隆景ら毛利方の大将は笠岡で作戦会議を開いています。

また、天正10(1582)年、羽柴秀吉が毛利氏の配下である高松城(現在の岡山市にあります)を水攻めした時には、毛利氏に味方する足利義昭(室町幕府最後の将軍)も笠岡城に入り、毛利軍を後方から支援しています。

このような山城は、常に何らかの拠点や交通の要所の近くに築かれました。城のあった場所には、今でも城、要害などの小字名・地名が残っています。戦国乱世は、笠岡に住む人々をも、いやおうなしに巻き込んでいったのです。



笠岡城跡。(現在は古城山とも呼ばれている)。  
水軍を率いた村上氏にふさわしく、海に突き出た丘の上に築かれた城だった。

13 戦国時代に

合戦があったの？

戦国時代

応仁元(1467)年、応仁の乱がおこり、日本は群雄割拠の戦国時代へと突入しました。各地で下克上の気運が高まり、実力のある家臣が主君を倒してのし上がっていきました。越後の上杉謙信、甲斐の武田信玄、尾張の織田信長、安芸の毛利元就らが、やがて何国も支配する大大名へと成長することは皆さんご存じのとおりです。

笠岡の地にも、戦国乱世の時代が訪れました。かつて室町幕府の中で安定した地位を得て笠岡を支配していた陶山氏は権力を失い、やがて笠岡からいなくなりました。それに代わって、台頭してきた領主たちがいます。ここでは、その代表として小田氏と村上氏を取り上げてみましょう。

戦国武将の小田氏は南北朝時代に京都からやって来たとも言われ、その名のとおり現在の矢掛町小田に本拠地を置いていた小領主でしたが、しだいに勢力を伸ばし、笠岡市域の甲斐、山口、新賀もその領地とします。永禄8(1565)年、小田政清は山口の馬鞍山に城を築き、ここに移り住みました。そしてその翌年には有岡氏の持ち城だった走出の折敷山城までも手に入れ、着々と支配地を広げていきます。

いっぽう海に近しい笠岡の辺りは、このころすでに村上氏の領地となっていました。笠岡城主の村上隆重は北へ北へと領地を拡大し、

とうとう吉田まで手に入れました。村上氏は瀬戸内海の水軍を率いて活躍しているかなりの兵です。

そしてついに、村上隆重は、小田政清と雄を決すべく、山口村に攻めこみました。世にいう「萌黄カ原の戦い」です。

互いに一步も譲らぬ激しい戦いで、おびただしい死傷者が出ました。戦場で流れた血は山野を赤く染め、これが萌黄カ原の語源になったと伝えられます。この萌黄カ原の場所は、笠岡市山口の中ノオあたりだと言われています。

この対決の結果は、どうやら小田側が勝利して、なんとか領地を守り通したようです。戦国時代の笠岡で最大級の合戦は、こうして幕を閉じました。

その後、小田氏と村上氏は中国地方の覇者となった毛利氏の支配下に入り、各地で行われる合戦に、毛利軍として参加するようになりました。



萌黄カ原の古戦場を北から望む。

現在は林となっているところにかつては街道があった。両軍はそのあたりで激突したものである。

14 戦国武将たちは

その後どうなったの？

安土桃山時代

時は永禄11(1568)年、中国地方の覇者毛利元就は、北九州の強敵、大友宗麟との間に戦いを開きます。毛利の主力軍は、北九州に出陣しました。

その際について謀反を起こし、備後の神辺城をうばい取った一人の武将がいました。藤井皓玄です。藤井皓玄は、もとは神辺城の家老だったのですが、毛利家の政策に不満を抱き、神辺城を飛び出してしまった人物です。そして浪人に身をやつしながらも、ずっと機会をうかがっていたのでした。

永禄12年、ついに長年の望みがかなって、彼は神辺城を手に入れますが、やはり無理があったのか、わずかな期間で落城してしまいます。彼はやむなく備中国浅口郡西大島村(現在の笠岡市西大島)まで逃げて来ますが、そこにも鴨方の細川勢が迫ってきました。

ついに御獄山に追いつめられた皓玄は、ここで自刃します。現在でも、西大島のある池のほとりに、藤井皓玄の墓といわれる場所があります。

一方、笠岡の北部を領有していた小田氏はどうなったかということ、永禄4(1595)年、毛利氏の命令で領地を安芸国(現在の広島県)に移され、長年守り抜いてきた小田の地を召上げられることになりました。小田元家は、「長雨にてる日の本のてらざれば小田にみのらぬいねというなり」という一首を残し

て去っていきました。この歌、一見稲が実らないことを歌っているように見えますが、よく見ると「いねと言ふ成り」、つまり「出て行けと言われていいなり」とも読むことができます。彼の無念さが伝わってくるようです。

次いで慶長4(1599)年、笠岡の南部を領有していた村上景広も、毛利氏の命令で、よその土地に領地替えとなりました。その跡を継いで笠岡城にやってきたのは、毛利元就の子、毛利元康でした。元康は、より強固な城をつくるべく西の浜(現在の笠岡市笠岡西本町あたり)の漁師たちを魚渚(現在の笠岡市金浦)に移住させ、ここに堀をこしらえようとします。このできごとが、「西浜」という不思議な地名が生まれる元になりました。

ところが、ちょうどその年(1600年)関ヶ原の戦いがおこり、築城計画は中止されます。この戦いで毛利方の西軍は敗北。笠岡は毛利氏から取り上げられ、以後は大名領・天領として変遷を重ねていくこととなります。ここに、戦乱の時代は終わり、安定した徳川政権のもとで、260年以上も続く江戸時代が始まりました。



藤井皓玄の墓があったという場所には、現在、藤井神社がまつられている。

## ⑮ どんないががいたの？

■江戸時代

関ヶ原の戦いで勝利した徳川家康は慶長8(1603)年、江戸に幕府を開きました。

江戸時代の始まりです。元禄11(1698)年以降、笠岡地域の大部分は、幕末までずっと天領(幕府の領地)として扱われました。

天領を治めていたのは、幕府から派遣された代官です。もちろん笠岡にも代官所が置かれていました。笠岡の代官所は、今では跡形も残っていませんが、現在、笠岡小学校の体育館などが建っているあたりにあったようです。

ところで代官というと、どうしても「悪代官」のイメージがつきまといまいます。テレビの時代劇では、必ず悪徳商人とつるんで、善良な町人を苦しめる代官ですが、笠岡には、いったいどんな代官がいたのでしょうか。

笠岡の代官を務めた人は30人を超えています。その中には有名な代官も含まれています。井戸平左衛門は、「いも代官」の愛称で知られています。彼は享保17(1732)年から石見国大森代官と笠岡代官を兼務しました。還暦(61歳)をむかえる平左衛門をあえて代官に抜擢したのは、かの大岡越前守忠相の推薦があったからだともいわれています。そして、この平左衛門が、未曾有の大ききんに際して領民の救済に力を尽くし、甘藷(サツマイモ)を導入して凶作に備えたことはみなさんご存じのとおりです。

また、天明8(1788)年から久世と笠岡の

代官を兼務した早川正紀(八郎左衛門ともいいます)は笠岡に敬業館という学校を創ったほか、捨て子などの悪い風習をやめさせるべく、領民の教育に力を注ぎ、幕府から表彰された立派な人物です。

しかし、中にはその反対に、領民からまいたくない代官もいたようです。

天保11(1840)年、笠岡は倉敷代官所の支配下に入り、笠岡代官所は倉敷代官所出張所へと格下げになりました。これ以後、笠岡には代官の部下である手代が派遣されて仕事をすることになったのです。

そして、慶応4(1868)年、京都の鳥羽・伏見の戦いで幕府軍が敗北したことにより、倉敷代官所管轄地は幕府の手を離れて朝廷に没収され、天領笠岡の歴史は幕を閉じました。



笠岡の威徳寺に伝わる井戸平左衛門の肖像画。威徳寺には井戸代官のお墓もある。

## ⑯ 敬業館は どんな学校だったの？

■江戸時代

敬業館は江戸時代、笠岡(今の笠岡市笠岡)で開かれた庶民の学校です。江戸時代の庶民の学校と聞いてすぐに思い浮かぶのが寺子屋ではないでしょうか。寺子屋で教えていたのは主に「読み・書き・そろばん」といった基本の知識であり、生徒は子供たちでした。笠岡でも1800年代に入ると、一つの村に一、二カ所の寺子屋が開かれ、明治の初めごろまで続きました。でも、敬業館は寺子屋ではありませんでした。ここで教科書として使っていたのは漢書・史記・四書・五経といった歴史や道徳に関する難しい書物です。つまり、敬業館は学問のための学校だったのです。

天明8(1788)年、久世代官の早川正紀は、笠岡代官を兼務することになりました。早川は治水工事・産業振興など多くの分野で業績を残した希代の名代官です。彼が特に熱心に取り組んだのは、領民の教育でした。このころ、村々では貧しい家庭が捨て子をするのがよくあり、それを根絶することを目指して、今でいう道徳教育のようなことを行っていたのです。

そんな折、笠岡村の石橋屋久右衛門ら26人の有識者から一通の請願書が提出されます。「年寄りから若者まで、希望者ならだれでも集まって教えることができるような学校を作ってください。建設費用はわれわれ志願者が全額受け持つので、だれにも迷惑はかけません」という内容のものでした。

これを受けて、早川代官は寛政9(1797)年、笠岡村の八幡平に敬業館をつくらせました。

そして教授には、陣屋稲荷神社の神官だった小寺清先を任命します。小寺清先は、笠岡で一番の学者として知られていました。そのうち生徒は笠岡周辺からだけではなく、備前(岡山県東部)、備後(広島県)や、遠くは長門(山口県)、豊後(大分県)などからも続々と集まって来ました。庶民の学問の場が少なかった当時としては、笠岡がいかにもすすんでいたかがわかります。

初代教授の清先亡き後、敬業館は経営不振に陥ったりもしますが、明治16(1883)年まで、笠岡の人々の学問の場として継続しました。

敬業館は、笠岡に学問の灯をともし続けてきた、いわば「教育のシンボル」と言えるのではないのでしょうか。



復元された敬業館の門と

塾舎(生徒の寄宿舎)。



敬業館の  
初代教授  
小寺清先。

17 ちからいし いし  
力石とはどんな石？

■江戸時代

とつぜん 突然ですが、みなさんは、どれくらい重い荷物を持ち上げることができますか。一般の人で、百キログラムのものを持ち運ぶ人は、そうはいないでしょう。ところが、江戸時代の笠岡には、それ以上の荷物を運ぶのを日々仕事にしていた人たちがいました。浜仲仕と呼ばれた男たちです。

江戸時代、笠岡の港には、諸国の物資を積んだ船が出入りしていました。古城山にある稲富稲荷神社の玉垣は、江戸時代から明治時代にかけて、笠岡港にゆかりのある全国各地の商人・船主たちが寄附金を出して作ったものです。当時の笠岡港が、たいへん賑わっていたことがうかがわれます。その港で、浜仲仕たちが働いていました。彼らの仕事は、船に荷物を積んだり降ろしたりすることでした。どの男もみな力自慢の猛者たちばかりで、米俵を人が一つかつげば、自分は今一つ俵をのせて二つかつぐといった調子で、互いに力を競い合っていました。

その浜仲仕たちが力試しをした石が力石です。力石を持ち上げて力試しや力くらべをする競技は、江戸時代の末には全国で広く行われていたようで、瀬戸内海では笠岡市、尾道市、福山市鞆の浦などに、当時使われた力石がたくさん残っています。

それではこの力石をどうやって持ち上げたのでしょうか。いろいろの方法があったと思いますが、記録に残ったかつぎ方を一つ紹介します。力石の下に綱をかけて、それ

を持って胸のあたりまで抱え上げるようにします。そして、そのまま一気に顔の横にかつぐように持ち上げるのです。石の表面は滑らかにしてありますが、それでも腕の皮膚はすり切れて、血を流したりしたそうです。

笠岡港にあった力石は、現在、笠岡市立郷土館の玄関先に16個が保管されていますが、最も軽いものでも97キログラム、その他はすべて100キログラム以上あり、浜仲仕たちの力の強さを物語っています。

なかでも最も重いのは、大湊弥九郎の上げた力石で、何と206キログラムもあります。このとき、弥九郎がバランスを崩して倒れないように、差添人として大湊富吉が弥九郎の体を支えるか、または石に手を添えるかしてサポートしたものだと思われます。

弥九郎の名を刻んだ力石は他にも二つあり、一つは嘉永7(1854)年の年号が刻まれています。折しもこの年は、ペリーの求めに応じて日本が鎖国政策に終止符を打ち、ついに開国することになった年にあたります。

笠岡にも、明治の夜明けがもう間もなく訪れようとしていました。



大湊弥九郎の名がきざまれている力石。

昭和初期までは、各地に力石を持ち上げる

行事が残っていたという。

18 かさおか けんちょうしよざい ち  
笠岡が県庁所在地だった？

■明治時代

笠岡に県庁が置かれたことがありました。明治5(1872)年6月から、明治8(1875)年12月までの短い間のことでしたが、それは笠岡の誇りともいべきできごとでした。

明治4(1871)年7月、明治新政府は廃藩置県を断行します。これによって全国に3府302県が置かれることとなります。その後、はじめの小さな県が統廃合をくり返し、数を減らしながら現在の行政区画(都道府県)に近づいていくわけですが、その過程で笠岡にひととき小田県庁が置かれたのです。

小田県とは、かつて備中国と呼ばれていた岡山県の西部に、福山市周辺を加えた範囲を指しています。人口約50万人で、当時としては大きな県でした。この小田県の県庁が、倉敷でも、福山でもなく、笠岡に置かれた理由としては、笠岡は小田県の中央にあること、港町であり情報伝達や交通の面からも秀でていたこと、そして代官所の建物をそのまま利用すれば、県庁の建設費用がおさえられること、などが挙げられています。

明治5年10月には、現在笠岡小学校があるところに、小田県の新庁舎が完成しました。県庁にふさわしい正門として、都守郡妹尾村(現在の岡山市妹尾)にあった戸川陣屋の門が移築されました。これが、現在の笠岡小学校正門です。門の軒丸瓦をよく見ると、戸川氏の家紋「三本杉」がデザインされています。

ここで注目したいのは、県庁が置かれたという事実よりも、むしろ小田県の県政がと

ても先進的なものだったということです。文明開化の流れのなかで、岡山県で最初の新聞・小田県新聞を発行したり、西日本では初めてといわれる小田県展覧会を開催して、名品・珍品・外国の資料など、さまざまなものを展示したりしました。

そして、笠岡の地福寺で、臨時の民撰県会が開催されました。これは、各地区の代表者を選挙で決めて、みんなで県政について話し合うという会議であり、たくさんの方が政治に参加する機会をつくった、当時としては画期的なできごとでした。

その後、残念なこと小田県はわずか3年6カ月で岡山県に合併してしまいました。それ以後、笠岡は岡山県の西端のまちとして今日に至っています。余談ですが、明治5(1872)年、小田県庁地券局に筆生(文字を書き写す仕事をする人)としてひとりの青年が勤務していました。この希望に燃える18歳の青年こそ、後に「憲政の神様」と呼ばれ「悲劇の首相」となる、犬養毅その人だったのです。



小田県庁があった場所は現在笠岡小学校となり、門だけが当時の面影を伝えている。

## 19 三つのこぼれ話

今回は、これまでに割愛した数多くのエピソードの中から、三つの話題を紹介したいと思います。

世界最古の木造建築は法隆寺、では笠岡最古の木造建築は何でしょう。答えは甲弩にある神護寺の本堂です。建てられた年代は、永禄11(1568)年と屋根裏の棟木に書いてあります。織田信長が活躍していたころのことです。そのころ神護寺は戦国武将の小田氏の後ろ盾を得ており、寺の勢いも盛んだったのでしょう。

次は、干拓にまつわる伝説を紹介いたします。笠岡では、江戸時代に多くの干拓地がつくられて飛躍的に土地を増やしました。でも、まだ機械もなく人力だけが頼りの当時は、干拓は一步間違えば死に直結する危険な工事でした。

富岡新田は、江戸時代初めに福山藩主の水野氏が干拓を命じた土地ですが、ここも工事がかなり難航していました。いくら堤防を築いても、波によって壊されてしまいます。

「これは、海の神の怒りにふれているのだ」「女の子を人柱にすれば、怒りはおさまるだろう」「はて、だれを人柱にしたものか」

そこに、神島の天神様にお参りに来た父と娘がおりました。その娘に頼んだところ、人柱になる決心をしてくれました。娘の名は、お七といました。お七を人柱にしてからというもの、堤防が崩れることは二度となかったといえます。

お七は堤防の見える小高い場所に祭られました。これが富岡にある七面様(徳民於賀神社)だということです。……この伝説の真偽はともかくとして、人柱をたてたという伝説は各地に残っているの、工事の成功のためにその身を捧げた女性たちは、実在したのかもしれない。

最後は、伊能忠敬のお話です。伊能忠敬は、江戸幕府に命じられて日本初の、しかも驚異的に正確な日本地図を作った人物です。この人が全国の沿岸を測量してまわるわけですが、当然笠岡にも来ています。

文化3(1806)年1月21日から、27日までかけて笠岡沿岸と島を測量した一行は、最後に笠岡の浄心寺に宿泊しました。この時、小寺清先の長男、清之が忠敬に会いに行きました。忠敬の日記には、清之が高島について語ったと記してあります。

以上で、時代順に歴史をたどる「通史編」はおしまいです。皆さんも機会があったら、身近な地域の歴史を調べてみてください。きっと新たな発見が待っていることでしょう。



徳民於賀神社。

神社の伝承では、富岡新田の守り神として七面

大明神を祭ったのが始まりといわれている。

## 20 笠岡の町は

### いつごろつくられたの？

前回までで、原始時代から笠岡の歴史をたどる通史編は終わりました。このページからは、毎回テーマを変えてお話をします。今回は笠岡地区の町並みについてのお話です。近年笠岡の駅前周辺にも広い道がついて、ずいぶん交通の便がよくなりましたが、ひと昔前までは、町の中は細い道が迷路のように入り組んで、たいへん複雑な構造になっていました。そして町のいたる所に寺があり、縁日ともなれば大勢の人でにぎわいました。この笠岡の町は、いつごろできたものなのでしょう。

平成5年の秋、笠岡の駅前通りで発掘調査が行われ、砂の中から古墳時代の土器が出土して話題になりました。その中には、塩を作るための土器・製塩土器もたくさん混じっていました。古墳時代には、笠岡駅前周辺がまだ砂浜だったこと、そして砂浜は遠浅の海につながっており、そこに生きる人々はこの豊かな海を利用して生活していたことがわかったのです。

笠岡に町並みと呼べるものが作られていったのは、鎌倉～室町時代からのことだと思われます。室町時代には陶山氏の支配のもと、遍照寺も大きな存在の寺になっていたようなので、かつて砂浜だった場所の大部分は、すでに町へと変化していたことでしょう。

現在笠岡の町中にある寺の建物のなかには、江戸時代から受け継いで使っているもの

がかなりあります。笠岡の町に現存する最古の木造建築は、慶長11(1606)年に建てられた遍照寺の多宝塔です。

多宝塔というのは、ごくごく簡単に言うと、二重の塔で一階が方形、二階が円形の平面形になっているものをいいます。機会があったら実物をよく観察してみてください。

それと、この多宝塔の横に年経たイチョウの木が生えていますが、この木は多宝塔建立記念に植えられたとされています。ということは、この大イチョウは約400年の間、笠岡の町の移り変わりをずっと眺めてきたことになりそうです。

「いも代官」井戸平左衛門も、きっとこの木を見上げたことがあったでしょう。多宝塔とイチョウの木は、まさに「寺の町笠岡」のシンボルであり、私たちが未来に伝えてゆべき大切な財産と言えるでしょう。



遍照寺のしだれイチョウ。

イチョウは笠岡市の市木でもある。

## 21 港はどんな役割を果たしてきたの？

笠岡の歴史を知るうえで重要なキーワードの一つに「海」があります。笠岡は「海」と深くかかわり、「海」を基にして発展してきたと言っても過言ではないでしょう。

かつて縄文時代には、笠岡沿岸にたくさんの貝塚がつけられました。豊かな海は、定住の始まりと人口の増加をもたらしたのです。そして古墳時代には、塩づくりという産業が沿海や島の人々の生活を支えました。また、このころから、海上交通も盛んに行われるようになったことでしょう。笠岡では、陸の道以上に海の道が威力を発揮してきました。

平安時代の末に西行の残した歌集『山家集』には、真鍋島に京都から商人がやって来て、海産物を商っていたと書かれています。

また、飛鳥小学校の敷地内に残っている大飛鳥遺跡では、発掘調査によって鎌倉時代のひとびとの生活跡が見つかりましたが、土器や釣り針・網の重りに混じって中国産の焼き物（青磁・白磁）や貨幣が意外とたくさん出土しました。大飛鳥のような小島でも、漁業や海運にたずさわることによって生計を立てていけたのです。

笠岡の港は室町時代から発展し始めました。文安2（1445）年の『兵庫北関入船納帳』には、兵庫北関という港（現在の神戸市にあたります）に一年間のうちに入った船の所属港や積み荷などが全部書いてあります。その

なかには、笠岡港に所属する船も記録されています。積み荷は米、豆、塩などです。

江戸時代になって笠岡に代官所が置かれると、各地の年貢米をはじめ、さまざまな物資を積んだ船が笠岡港に出入りしました。港の周辺には商家や運送業者が軒を連ね、町はさらに発展しました。

明治24（1891）年、山陽鉄道が初めて開通するときに、港の一部が埋め立てられ、線路が建設されました。それ以降、鉄道による物資の流通も盛んになり、笠岡は海と陸の両面で、交通の要所となったのです。

しかし、笠岡の海は遠浅なので、大型の船が港に入りにくいという欠点がありました。現在では、その遠浅の海を利用して笠岡湾干拓が行われ、海と人との関係が大きく変化しようとしています。とはいえ、海は笠岡に住む人々たちにとっては、もう何千年も前から共に歩んできた庭のようなものです。これからも、この海を大切に守り、次の世代に伝えることが、私たちの大事な役割ではないでしょうか。



大正時代末、笠岡港のにぎわい。除虫菊の入った俵を船に積みこみ、島から到着したイリコ袋をリレーでトラックに乗せている。

## 22 土地はどうやって増やしたの？

笠岡が、海を生かして発展してきたことは前回お話したとおりですが、その反面、大きな河川にめぐまれておらず、水と土地が不足しているという弱点がありました。

水不足には、ため池を作ることで対処しました。笠岡には、実に3千カ所以上もの、ため池があります。

そして、土地の不足に対しては、干拓や埋め立てを行って、少しずつ土地を増やすことを目指してきました。干拓地は笠岡最大の特徴の一つです。干拓というのは、もともと海だった場所を堤防で仕切り、水をくみ出して陸地にするという方法です。笠岡の海は遠浅なので、この方法に適していました。

笠岡が飛躍的に土地を増やしたのは江戸時代、水野勝成の治世以降です。元和5（1619）年、福山藩主となった水野勝成は笠岡もその領地とし、積極的に干拓を行いました。水野領時代の干拓地をざっと挙げてみると、吉浜新田、生江新田、富岡新田、神島青島新開、白石島新開、茂平の干拓地などがあります。しかし、元禄11（1698）年、水野家の跡継ぎは絶え、その領地は幕府に没収されてしまいました。

それから、西大島新田と入江新田は、矢掛町出身であり大坂で土木請負業をやっていた鳥越新兵衛らによってつくられました。最初は干拓のことを幕府に願い出てもなかなか取り上げてもらえず、ずいぶん苦労し

たようですが、ようやく許可を得て干拓地を完成させたのが享保16（1731）年のことでした。その後新兵衛は、干拓によってできた入江新田村の庄屋を務め、91歳で亡くなりました。彼の墓は今でも入江の丘の上から干拓地を眺めています。

茂平の吉原新田も大きな干拓地でした。文化8（1811）年に完成した長さ約500mの防潮堤が、今でも、海から遠く離れた内陸部に残っています。

そして、昭和の時代に入って再び大規模な干拓が行われました。昭和33（1958）年に完成した富岡湾干拓地は、現在では番町と呼ばれて、新たな市街地を形成しています。さらに、平成2（1990）年、最大の笠岡湾干拓地が完成しました。

こうして海から恵みを受けてきた笠岡は、その海を利用することにより、長年の悲願だった広大な土地を手に入れました。そして今、そこから新たな一歩を踏み出そうとしています。



広大な笠岡湾干拓地。  
1651ヘクタールの面積がある。

23 笠岡諸島には  
どんな文化財があるの？

笠岡の特徴の一つは、島が多いことです。

大小無数の島々は多島美などといわれ、瀬戸内海国立公園の一部を担っています。人が住んでいる島としては、高島、白石島、北木島、

真鍋島、大飛島、小飛島、六島があります。

これらの島々は、それぞれ独自の文化を形成してきました。

高島は陸地に近いこともあってか、古くから人が住んでいた島です。縄文土器や古墳時代の土器が出土する遺跡があり、古墳時代には塩づくりも盛んに行われていました。

古事記という書物の一節に「その昔、神武天皇は、日向を出発して東へ向かう途中で吉備の高島に8年ほどいた」とあり、ここがその「高島」ではないかともいわれています。ただし、「邪馬台国」と同じように「高島」の候補地もあちこちにあります。また、古事記に書かれていることが史実であると証明された訳ではありません。

白石島には、白石踊という盆踊りが伝わっています。一つの音頭（歌声）に合わせて何種類もの踊り（男踊・女踊・娘踊・奴踊りなど）を踊るといって珍しい盆踊りで、源平合戦の戦死者をとむらうために始まったといわれています。

真鍋島は、平安時代の終わりごろから戦国時代くらいまで、真鍋氏の根拠地として栄えました。島には源平の戦いで亡くなった戦死者の供養塔とも言われる古い石造宝塔や五

輪塔があります。真鍋島はやや細長い島ですが、いくつか山城跡が残っており、今でも城山などと呼ばれています。おそらくこの頃、真鍋島は、まさに全島を要塞化して、海賊衆（海辺の武士団）の拠点にふさわしい機能を備えていたことでしょう。今も脈々と受け継がれる海の男たちの荒々しい気風は、伝統行事「走りみこし」で爆発します。

伝統行事といえば、北木島の大浦で行われる「流しびな」も古くからある行事です。ワラの小舟に色とりどりの千代紙で作った人形を乗せ、一年の健康をお祈りしながら海に浮かべるこのやさしい行事は、旧暦のひな祭りの日に行われます。

また、北木島は、「北木石」と呼ばれる品質の良い石の産地として知られています。明治時代から本格的に採石が始まり、島から切り出された石が各地に出荷されました。

このほかにも、それぞれの島にはさまざまな伝統や文化があり、とてもここで書ききれものではありません。これらの島の文化は、大切にしていきたい笠岡の個性の一つです。



白石島の盆踊り・白石踊。

島には伝統的な文化や風習がよく残っている。

24 笠岡には  
どんな民話があるの？

むか～し昔、ある所に藤五郎という大男が住んでおった。藤五郎はたいそう力持ちで、江戸で相撲取りと勝負しようとしたが、相手のほうから恐れて逃げ出してしもうたくらいじゃった。

村の者は、この藤五郎の乱暴なふるまいをしだいに恐れるようになっていった。そしてついに、村の庄屋は藤五郎を退治する決心をしたのじゃった。ある日、庄屋の家に呼ばれた藤五郎が出かける支度をしていると、おっかさんが「今日は長いキセルを持ってお行き」と言うた。じゃが藤五郎は、そのまま短いキセルを持って行った。

庄屋は藤五郎と世間話をしながら隙をうかがっておった。すると藤五郎がキセルを吸おうと火鉢に首をのぼしたので、今が好機と斬りつけた。さすがの藤五郎もこれにはかなわず、あえなくやられてしまったのじゃった。笠岡市吉田にある藤五郎池は、この藤五郎が朝飯前に（かんたん）に掘ったということから、その名がついておるそう。

もう一つお話じゃ。笠岡市園井と笠岡の境にある山を「とびの子山」というておるが、その昔、山の上に城があったそう。この「とびの子山」の頂上には金の鶏が埋めてあって、毎年旧暦一月一日の朝、ただ一声だけ鳴くという話じゃ。この声を聞いた者は、たいそう金持ちになるといわれておるが、まだ聞いた者はおらんという。

もう一つおまけにお話じゃ。少～し昔のこと、笠岡市真鍋島の「雪の浜」という寂しい浜に、不思議な小坊主が出没しておった。この小坊主、浜辺を通りかかるとはだれかになしにつかまえては、相撲を取ろうと誘う。またある時は、漁師が舟を岸につないでおると、その綱を引っ張って驚かせたりもした。年寄りの話では、この小坊主の正体はカッパじゃと言われておるそう。

今と違って情報の伝達が主に口承（口づたえ）で行われていたころ、日本全国で伝説や昔話が生まれました。おじいさんやおばあさんが、ある時はいろりのそばで、またある時は夜なべ仕事をしながら、お話ししてくれたそうです。テレビやインターネットが普及し、情報があふれる今日の中で、民話が語り継がれなくなってしまうのは少し寂しいことだと思いませんか。



「真鍋島とこのはな公園」に残る「化石」。

妖怪伝説が伝わる雪の浜は、かつては寂しい浜だったが、現在では公園となっている。その片隅に「化石」と呼ばれる大岩が保存されている。

## 25 どんない地名があるの？

みなさんが住んでいる所の地名は、何とい  
いますか。住所を書くときには、走出・尾坂・  
横島・神島外浦などの大字地名を使いますね。

それでは、そこからさらに小さく分かれた  
単位である、大磯・蛸村・金風呂・正頭など  
の小字地名は聞いたことがありますか。こう  
いった昔ながらの地名は、その多くが江戸時  
代、あるいはそれ以前から受け継いで使っ  
ているものなのです。古くからある地名には、  
その土地の歴史や文化、人々の生活などが映  
し出されています。

例えば大字「甲弩」。難しい読み方の地名で  
すが、実は、平安時代以前から使われている、  
由緒正しい地名なのです。もともと「この」  
は川野（川によってひらけた原野）に由来す  
る地名だといわれています。甲弩の北側には、  
小田川という大きな川が流れています。

次に「生江浜」。「生える」とは「成長する」  
という意味だそうです。「おえはま」は「成長  
する浜」という意味になります。潮流によ  
って砂がたまり、その上に集落がつくられた  
のが始まりです。

「吉浜」は、江戸時代に福山藩の干拓によ  
って誕生しました。もともと海だったため、  
海辺に生えるヨシという植物が生い茂って  
いたと伝えられます。

岡山県下有数の難読地名といわれる「西  
浜」（現在の金浦）は、毛利元康が西の浜の漁  
師たちを魚渚村へ移住させたことで生まれ  
た地名であることは、以前にお話ししましたね。  
小字でいうと、お城があったところには

「城山」とか「要害」、製鉄の遺跡があると  
ころには「鉄塊」や「鍛冶屋」などの地名が  
残っています。また、古代寺院の関戸庵寺が  
あった地区の小字「唐臼」は、寺の大きな礎  
石が石臼に似ていたためについた地名だと  
思われます。

笠岡で忘れてはならないのは、新山、大井、  
今井などの「旧村名」が今でも残っているこ  
とです。これらの村は、明治22（1889）年、  
岡山県で町村制が施行されたときに誕生し、  
昭和20～30年代に笠岡市と合併したと  
きに無くなりました。（地図の上から名前が  
消えました。）ところが、実際には今でも地区  
としてのつながりが残っているのです。小学  
校や公民館などの名前にも、その名残があり  
ますね。明治の合併のときに生まれた比較的  
新しい地名ですが、そこにも様々な由来があ  
ります。

例えば、陶山村（現在の有田・押撫・篠坂・  
入田）という村名は、常行院（三寶院の前  
身）というお寺に伝わってきた仏画の箱に  
「小田郡陶山庄」と書かれていたことから、  
名付けられました。

城見村（現在の犬宜・用之江・茂平）は、  
三つの村の中央にある大見山に登ると、西に  
福山城、東に古城山が見えることからその  
名が生まれたそうです。

こうして地名の由来が分かってくると、そ  
の地域に対する見方が変わってきませんか。  
地名それ自体には形がありませんが、これも  
先人から受け継いでいる大切な文化遺産の  
ひとつといえるでしょう。

## 26 どんない方言を使っているの？

突然ですが、「かばちゅーたれるな！」と  
いって怒られたことはありませんか。「かば  
ちをたれるな」とは、このあたりの方言で、  
「口答えをするな」という意味です。

地方の風土に育まれた、なつかしい言葉。  
それが方言です。生活の変化によって、だん  
だん標準語を使うケースが多くなってきて  
いますが、それでも方言は私たちの体に染  
みついています。

笠岡市が生んだ小説家、木山捷平さんの  
小説『尋三の春』に、こんなシーンが出てき  
ます。主人公は、小学3年生。クラスの担任  
を、新任の大倉先生が受け持つことになった  
ときの子どものたちの会話です。

「今度の先生はきつと面白えど」  
「面白えけど怒る時には怒るかもしれんど」  
「じゃけんど、怒る先生の方がええ先生じゃ  
ど」

「罰掃除をさせるじゃろうか。わしゃ、罰掃  
除は嫌いじゃど」

「わしゃ、ひいきの方がもつと嫌いじゃ。今  
度の先生はひいきはせんと思うど」

明治時代の終わり頃の設定ですから、今の  
ことばと少し違っているところもあるかも  
しれませんが、この会話を読んでいると、な  
んだか親しみがわいてきませんか。このセリ  
フを、標準語に直して読んでみてください。  
受ける印象がだいぶ違ってくるでしょう。

笠岡の方言とひとくちに言ってもいろいろ  
あって、岡山県の備中方言と広島県の備後  
方言が混じっている上に、島の方言は、陸地  
の方言とまた違っています。年配の人ほど方  
言をよく使います。次のような言葉を、聞いた  
ことはありませんか。

はぶてる（むっとして怒る）

いたしー（むずかしい）

えっと（たくさん）

えどかす（だます）

くらす（たたく）

たちまち（とりあえず）

どじ（わけのわからないこと）

さばる（ひっぱる）

しますらー（いたします）

すける（置く）

みてる（なくなる）

やっちもねー（つまらない）

そーのーても（そうでなくても）

さきーいかー（先に行くよ）

また、「駅につく」は「えきーつく」、「空は  
青い」は「そらーあえー」、「ここへ来い」は  
「こけーけー」となります。

家族や気心の知れた人たちと方言で語り

合うのは楽しいことです。

方言には、その地域  
の個性と、そこで生き  
てきた人たちの心が映  
し出されているような  
気がします。



## 27 どんないせきがあるの？

このごろは遺跡発掘調査、考古学といった言葉が新聞やテレビにたびたび登場しているのですが、それに対するイメージを多少なりとも持っておられる方は多いのではないのでしょうか。今回は、この遺跡というものについてお話ししましょう。

遺跡とは過去の人々が生活のなかで残した痕跡、とでもいうべきものです。遺跡と聞いてすぐに連想するのが古墳とか貝塚、竪穴住居跡などですが、そのほかにも製鉄などの生産の場、神様をまつた儀式の跡、昔の水田や道の跡などいろいろあります。変わった例では、日本ではじめて鉄道が開通した新橋駅の跡（東京）が発掘調査され、プラットホームが見つかったりもしていますが、これも遺跡の一つです。

現在、日本全国にある遺跡は44万カ所とも言われていますが、そのうちどれほどの遺跡が世間に知られているのでしょうか。笠岡にある室町時代以前の遺跡の数は、私の知る限りでは現在320カ所ほどあります。おろそか以外にもまだ人知れず地下に眠っている遺跡もあるでしょうから、実際の数はもっと多いはずですが、では、笠岡に残るいろいろな遺跡を紹介しましょう。

まず、最も多いのは古墳です。北は走出から南は北木島まで、80基以上が存在します。それから城跡は20カ所以上、貝塚は5カ所が確認されています。

走出には、条里の推定地が残っています。古代の水田は規則正しく碁盤の目のように区画されていました。走出の水田は、今でもそのときの土地区画を保ったままなのです。それから、複数の時代にまたがった遺跡もあります。笠岡の駅前からは、古墳時代から鎌倉・室町・江戸・明治まで各時代の、さまざまな物が出土します。

学校で見つかった遺跡もあります。大飛鳥遺跡は、昭和37（1962）年、飛鳥小学校的グラウンドに鉄棒を設置している時に初めて見つかりました。奈良・平安時代に、遣唐使などの船が安全に航海できるよう、海の神に祈りをささげたお祭りの跡といわれている、すごい遺跡です。

こうやって遺跡を見ていくと、笠岡がこれまでどのように歩んできたか、笠岡の人たちが何をしてきたかがよくわかります。遺跡はいわば、郷土の歴史を私たちに教えてくれる語り部でもあるのです。



1969年の大飛鳥遺跡発掘調査風景。  
校庭の中で調査が行われた。

## 28 発掘調査とは？

このごろの考古学ブームをもたらした原因の一つは、全国で行われている遺跡の発掘調査ではないでしょうか。少し興味のある方なら、吉野ヶ里遺跡（佐賀県）や三内丸山遺跡（青森県）のことをご存じのはずです。それだけでなく、新たな発見があったというニュースは毎日のように新聞やテレビをにぎわしています。それもそのはず、今や発掘調査は年に7千件以上行われているのです。発掘調査は、世間では宝探しのようなイメージで考えられていますが、実は違います。それは、正確に、しかも繰り返して記録をとりながら進めていく努力と忍耐の結晶なのです。では、発掘調査の手順を簡単に説明しましょう。

まず、遺物が出土する深さまで地表面を掘り下げます。この掘り下げは、機械で行うこともあれば、手作業で行うこともあります。このときによく使われるのがスコップ・クワ・ツルハシなどの道具です。危険・汚い・きつい三拍子そろった重労働です。発掘調査と聞いて、竹べらやハケですこしずつ土をどかしていただくだけでよいと思って参加した人は、まずここで大ショックを受けます。土器や何かの跡が見つかる、今度はやっと移植グテなど小道具の出番です。でも、まだ出土品を取り上げてはいけません。土の中から出てきた状態のまま置いてください。ここからが大切です。考古学では、物がどの地層の中からどういうかたちで出土した

かが大きなポイントとなります。そのため、それを写真に撮り、測量をして図面に描きこむ作業が必要なのです。また、人間が残した何らかの痕跡を見つけ出して、それも正確に記録します。調査員の専門的な知識と技術が要求されます。そして、調査の結果を皆さんに見てもらうために、現地説明会を開いたりもします。

調査がおわったあとは、報告書を執筆してその成果を公表します。以上が発掘調査のおおねの手順です。一筋縄ではいかないことがお分かりいただけたでしょうか。

最後に、法律のお話をひとつ。たとえばあなたの家の畑から、古代の土器が出てきたりしましょう。これはだれのものになるのでしょうか。法的には、埋蔵物は落とし物と同じような扱いになっています。そして、所有者が判明しない限り、出土品は都道府県（笠岡の場合は岡山県）のものになるのです。ああ、もったいないと思いませんか。でも、文化財は郷土の宝、みんなの財産です。社会に貢献したと思えば安いものではありませんか。



関戸廃寺の発掘調査現地説明会。  
調査の結果を公表するのも大切な仕事。

## 29 文化財はなぜ大切なの？

この本では、これまでさまざまな文化財をもとにして、笠岡の歴史と文化についてお話してきました。最終回は、こういった文化財を守り、受け継いでいくことがどんな意味を持つのかというお話です。少し硬いお話になるかもしれませんが、かんぺんして下さい。文化財は歴史の証人です。これを調べ、研究することによって、わたしたちは郷土の歴史と成り立ちを知ることができます。

例えば「戦争は弥生時代から始まった」とか「豊臣秀吉は刀狩を行って武士と農民の分離を図った」というのは、多くの人々が知っている歴史的なことからです。

でも、だれかが見てきたわけでもないのになぜそんなことが分かるのでしょうか。それは、何百、何千、いえ、それ以上の遺跡や古文書、文化財の研究の積み重ねがあるからこそ分かるのです。そして、人間の歴史には、まだまだ解き明かさなければならないことがたくさんあります。

また、学術的な価値だけでなく、文化財には郷土の顔という側面もあります。倉敷の町並みなどは、その顔としての文化財をうまく利用している例といえるでしょう。特に最近では、文化・風土を活かしたまちづくりが求められており、郷土の歴史を大切にすることは、大きな目で見ると決して損にならないと思えます。私たちがよその土地へ観光に行ったり、名所旧跡を訪ねたり、ガイドさんが語る歴史的な話に耳を傾けたりしますね。

歴史や文化財は、その土地の重要な個性なのです。

さらに、こうした過去からの遺産は、地域に住む人の心を結び付け、郷土を愛する心を育ててくれるものでもあります。たとえばお祭りなどの伝統行事は、地域のきずなを深めるきっかけになるし、身近なところに残る自然や文化財は、やすらぎとゆとり、ふるさとへの親しみや愛着を与えてくれます。

しかし、現在のわたしたちの暮らしは、国土の開発、生活スタイルの変化、人口の都市集中と過疎化、世代間交流の希薄化などの急激な変化に見まわられています。地域の歴史を物語る有形・無形の文化財が、次々とこの世界から失われているのです。先人の汗と涙の上に今の暮らしがあることが分からないければ、先人に対する尊敬の気持ちも生まれて来ないでしょう。

私たちが人間は、時には立ち止まって自らの歩んできた歴史を振り返り、先人たちが残してくれたメッセージに、謙虚に耳をかたむけることが大切なのではないでしょうか。文化財が、今を生きるわたしたち一人一人にそう問いかけているような気がします。

「過去を知ることは、現在（いま）を知ることである。そして現在（いま）を知ることによって、よりよい未来が見えてくる。」

これで私からのお話はおしまいです。最後まで読んでくださって、ありがとうございました。

〈おわり〉

著者：安東 康宏（あんどう・やすひろ）  
笠岡市教育委員会 主任学芸員

### 〔著者からのことば〕

この本は、平成8年、「笠岡の歴史Q&A」というタイトルで中国新聞に連載した記事に、手を加えて編集したものです。

もともと小学生のみなさんに読んでもらうために書いた文章ではないので、少し難しいかな？と思うところもありますが、大人の方にも読んでほしいと思っ、あえて簡単なことばに書きかえるのをガマンしたところもあります。分からない言葉がでてきたら、皆さん自身で調べてみてもいいでしょう。

この本を読んで、笠岡の歴史に興味を持ってほしい。一人でも多くの方に、ふるさと笠岡の良いところを発見してもらって、笠岡のことをますます好きになってほしい・・・そんな思いを持って書いています。この本が、先人（過去）と私たち大人（現在）、そして子どもたち（未来）をつなぐきっかけづくりに、少しでもお役に立てたなら幸いです。

最後になりましたが、創立50周年をむかえるにあたり、このような記念冊子を作ってください。笠岡市文化連盟の皆様、あつくお礼申し上げます。

発行者：笠岡市文化連盟（事務局：笠岡市教育委員会生涯学習課内）  
笠岡市文化連盟創立50周年記念事業実行委員会

顧問	安藤 一泉	副理事長	高橋 章治
会長	仁科 幸治		森山珠久己
副会長	中田 康生	常任理事	掛谷 典朗
理事長	井上 二郎		田賀屋 夙生
副理事長	吉原千鶴子	理事	土岐 弘明
	塩田 郁夫		高田 明子
	内田寿恵美		

印刷：アドハウス  
発行：平成24年4月